演題名　外来がん薬物療法患者における ePRO 症状入力の実態と継続利用に関連する因子―2293 例のリアルワールドデータ解析―

演者氏名　長田巧平
所属先　関西医科大学附属病院　臨床腫瘍科

長田巧平、生駒龍興、安田知代、朴将源、柴田伸弘、金井雅史

関西医科大学附属病院　臨床腫瘍科

【背景】Electronic patient-reported outcome（ePRO）は、がん薬物療法中の症状を患者自身が継続的に記録することで、有害事象の早期把握や患者・医療者間の情報共有に寄与する。一方、日常診療への実装には、必要な情報を確保しながら患者負担を抑え、継続利用できる入力方法の確立が必要である。しかし、実臨床における症状入力の実態や、患者背景および利用開始直後の入力行動と継続利用との関連を大規模データで検討した報告は限られている。本研究では、ePRO に入力される症状の特徴と継続利用に関連する因子を明らかにし、日常診療に適した入力設計を検討した。
【方法】がん患者向け治療生活サポートアプリ「ハカルテ」に蓄積されたデータから、87 種類の症状項目のうち 1 種類以上を実際に入力した 2293 例を対象とした。患者背景、利用期間中に入力された症状の種類・頻度、がん種別の症状分布を解析した。さらに、初回症状入力から 30 日以降にも症状入力を認めることを「30 日後継続利用」と定義し、30 日間の観察が可能な患者を対象に、年齢、性別、がん種および利用開始後 7 日間の症状入力日数との関連を検討した。多変量ロジスティック回帰分析では、30 日後継続利用の有無を目的変数とし、これらの因子を同時に解析した。
【結果】対象 2293 例の年齢中央値は 51 歳（IQR 44–57 歳）、女性 89.2%であった。がん種は乳がん 54.6%、大腸がん 7.6%、卵巣・卵管・腹膜がん 7.0%、膵がん 5.1%、肺がん 4.3%の順であった。患者は 87 種類の症状項目のうち、利用期間全体では 1 人当たり中央値 13 種類（IQR 6–23）の異なる症状を入力し、1 回の入力日には中央値 4 種類（IQR 2–6）の症状を報告していた。頻度の高い症状は、疲れ・だるさ 72.7%、頭痛 49.1%、手足のしびれ 48.0%、吐き気 47.0%、眠気 45.1%であった。症状分布はがん種によって異なり、膵がんでは腹痛 55.2%、食欲不振 47.4%、背部痛 36.2%、肺がんでは咳 38.8%、息切れ 36.7%、卵巣・卵管・腹膜がんでは手足のしびれ 77.6%であった。30 日後継続利用を評価可能な 2129 例中 1128 例（53.0%）が 30 日以降にも症状を入力していた。単純比較では、65 歳未満、女性、乳がん患者で 30 日後継続利用率が高かった。一方、利用開始後 7 日間の症状入力日数が 1–2 日、3–4 日、5–7 日の患者では、30 日後継続利用率はそれぞれ 26.0%、52.9%、77.8%と段階的に上昇した（p<0.001）。年齢、性別、がん種および初回 7 日間の入力日数を同時に解析した多変量解析では、初回 7 日間の入力日数が 1 日増えるごとに 30 日後継続利用のオッズは 1.61 倍であり（95%CI 1.54–1.68、p<0.001）、患者背景を考慮しても強い関連を認めた。
【結論】大規模リアルワールドデータから、外来がん薬物療法患者が入力する症状は多岐にわたり、その構成はがん種によって異なることが示された。また、単純比較では若年、女性、乳がん患者で継続率が高かったものの、患者背景を考慮した後も、利用開始直後の入力頻度がその後の継続利用と強く関連していた。